

# 城郭探訪

まちづくりと城の址

## 和歌山市 和歌山城

### 市のシンボル 豊臣・徳川の名城 和歌山城

和歌山市長(和歌山県)

尾花正啓



#### 和歌山城の歴史

和歌山市は和歌山県の西北部に位置する県庁所在地で、人口約35万人の都市です。本市の中央を流れる紀の川の南には、城下町を起点に発展した中心市街地があり、その周囲は川・海・山に囲まれ、豊かな自然

に彩られています。

本市の歴史を語る上で、和歌山城の存在は欠かすことができません。天正13(1585)

年、羽柴(のち豊臣)秀吉は反抗する雑賀・根来の勢力に対し紀州攻めを行いました。

太田城に籠城した雑賀衆らを水攻めした直後、秀吉は弟秀長に命じて、岡山(虎伏山)

に和歌山城を築かせました。普請奉行として築城を主導したのが藤堂高虎です。「築城の名手」、特に卓越した石垣構築技術で知られる高虎が、本格的に近世城郭づくりに取り組んだ最初の城が和歌山城と考えられています。虎伏山山頂から山裾、南東部の平たん地には、紀州の青石(結晶片岩)で積まれたこの頃の石垣が豊富に残っています。

桑山家、浅野家と城主の変遷を経て、元和5(1619)年には、徳川家康10男の頼宣が紀州藩55万5千石の藩主として入城します。ここに徳川御三家の一つ、紀州徳川家が成立しました。頼宣は、砂の丸や南



紀州の青石で積まれた16世紀末の石垣



白亜の和歌山城天守閣

の丸の造成などを行い、和歌山城の拡張を行いました。これにより、ほぼ現在の姿の和歌山城が完成します。



和歌山城と城前広場との一体的活用によりにぎわいを創出



二の丸北側の櫓群復元イメージ図

虎伏山の西峰に白垂の天守閣がそびえる景観は、和歌山市民にとってはなじみ深く、誇り高き市の象徴でもあります。落雷で焼失後、嘉永3（1850）年に再建された天守は、明治以降も残っていましたが、昭和20年の空襲で焼失してしまいます。同33年に再建されますが、総工費約1億2千万円のうち、ほぼ半分の寄附が集まったことから、当時の市民の熱意が伝わります。天守閣の外観は、建築史家藤岡通夫<sup>みちお</sup>さんの努力により非常に忠実に再現されており、江戸時代後期の天守の姿を今に伝えています。

## 和歌山城を中心としたにぎわいの創出

本市では和歌山城を確実に守り伝えるため、石垣などの保存修理を進めるとともに、江戸時代の和歌山城の姿を再現するための取り組みを行っています。その一つが城外南西に位置する扇の芝という芝地の再現です。以前は石垣が

隠れるように建物が立ち並んでいましたが、建物の撤去および往時の姿である芝地の再現に取り組んでいます。これにより、背後に高石垣や天守閣を望む城郭らしい景観がよみがえります。また、二の丸北側にあった櫓群<sup>ぐらぐら</sup>の復元にも取り組んでおり、実現すれば2層の櫓などが連なる壮観な和歌山城が再び姿を現します。

今後、和歌山城などの地域資源、そして人が持つさまざまなポテンシャルを磨き、新たな価値を引き出すことで、県都として魅力あふれる和歌山市を実現していきます。

一方、和歌山城を中心としたにぎわいの創出として、令和3年、和歌山城の目の前に文化芸術の拠点施設「和歌山城ホール」が完成しました。市民交流、文化芸術、コ

歴史探訪コラム

## 城と都市のでんせつ

江口知秀  
建設産業図書館 学芸員

### 和歌山城の人柱

城に人柱伝説はつきものだが、和歌山城も例外ではなく、和歌山が生んだ博物学者・南方熊楠の「人柱の話」には次のようにある。「徳川頼倫侯は屢々揮毫にてい（編輯者曰く、臥虎の二字を合せた字なれど活字なき故かなの儘にしておく）城倫と署せられた。和歌山城を虎臥山竹垣城といふ所へ漢の名臣第五倫といふのと音が似た故のことと思ふ。そんな六かしい字は印刷に困ると諫言せうと思ふたが口から出なんだ。是もお虎てふ女を人柱にしたよりの山號とか幼時古老に聞いて面白からずと考へたによる。」要するに和歌山城の別名「虎伏城」の由来が、「お虎」という女が人柱として「伏」せたからというところらしいが、南方はそれをつまらない話と切り捨てている。

以前、私が全国の利水・治水に伝わる人柱伝説を調べたところ、たとえば岩手県の千貫石堤では、「千貫で買われたお石という娘が」人柱になったとか、大分県の初瀬井路では「お初という娘が…」と言ったもので、はじめに施設名ありきで人柱云々はこじつけのように思われた。

こうした利水・治水施設の場合、多大な労苦を払い、時には犠牲者までも出して造り上げた施設が、永久に守られるように水神の加護を求め、人柱伝説を作り出したと思えなくもない。

対するに城の場合はどうかだろうか。近世以前の庶民にとって、立派な外観とはうらはらに内幕は知る由もなく、時には不穏な想像を膨らませたに違いない。そうしたことから、人柱伝説がこじつけられていったのではなかろうか。